

## 「介護帰省」

橋本 茂

一昨年 8 月、88 歳の母が癌で急逝した後、介護 1 の認定を受けていた 93 歳の父を高知より千葉に引き取り、介護してきた。93 年間住み慣れた郷里から離され、千葉のマンションでの生活を強いられた父の様子は、見るにしのび難いものであった。

幸い、昨年の 4 月より、私にとっては最後の特別研究休暇が与えられた。私は、4 月早々、郷里で父の介護をするために一緒に帰省した。ゆっくりと、高知の四季を味わえる生活は、1959 年に東京に出て来て以来、45 年ぶりのことであった。

父の家は、別荘地として造成された横浪三里県立公園という景勝の地にあった。周りには、十戸ほどの別荘があるが、ほとんど戸締りされたままであり、ここで生活していたのは私の両親だけであり、多くの人は、私の両親を別荘の管理人と思っていたようだ。すばらしい自然環境の中にあったが、ここは生活に不便であり、自動車が必要であった。父は 1934 年に運転免許を取った運転の大ベテランであり、毎日、自宅から下の港町まで、往復、40 分かけて日常の食事の材料などの買出し行っていた。両親は、南国の太陽をいっぱい浴び、海から来るオゾンいっぱいの新鮮な空気を吸いながら、庭づくり、畑仕事で、毎日を過ごしていた。

一昨年、8 月、私たち夫婦は、両親の住む市の高齢者介護担当の方からの要請で、足腰の弱った父の介護のことを相談するために高知に行った。そのとき母のことは心配していなかった。ところが、私たちが到着して二日後、深夜、母がひどい腹痛を訴えた。救急車を呼び病院に行った。診断の結果、母は即入院し、即手術となり、開腹したが、すべて手遅れの状態で、手の施しようがなく、そのままお腹を閉じた。母は意識を取り戻すことなく、一週間後に、天に召された。私の母教会の牧師の司式で、母の葬儀をしていただいた。母の死は私たちの予想もしなかったことであった。一人になった父を置いて帰ることもできず、結局、渋る父を千葉のマンションに連れて帰り、そこで、介護することになった。

こうして、ふるさと高知での父の介護生活が始まった。炊事洗濯すべて私の仕事であった。買出しはマイカーで下の街まで行った。一汁一菜を原則と決め、食事づくりをした。ご飯と、アサリやシジミの味噌汁、それに刺身や焼き魚、そして、食後の果物。洗濯は、自動洗濯機で行い、二階のベランダに干した。夕方には、父を風呂に入れ、背を洗ってやった。寝ている事の多い父にとっては、背中をゴシゴシ洗ってくれることは気持ちいいらし

く、「おおきに、おおきに」と礼を言った。父から解放されると、二階の私の部屋に行き、部屋いっぱい広げられた大学から運んだ20冊のアメリカの社会学の教科書から、使用頻度のおおひ社会学用語を1000個ほど選出し、それぞれの用語の意味を簡単に解説するという仕事を行った。こんな生活が繰り返された。

もちろん、父の介護については、父のケア・マネージャーさんといろいろと相談した。父の生活が安全かつ快適に行えるために、手すりの取り付け、風呂の改造、電動ベッドや電動車椅子の借り入れ、それから、ヘルパーさんの手配などについて相談した。こうして、父の介護もだんだん軌道に乗り、私にもふろさと高知をエンジョイする余裕が生まれてきた。あちこちの教会を訪ね、懐かしい方々と再会した。

時間の経つのは早く、10月、大学からは次年度の講義の時間割の希望を聞いてきた。父を再び千葉に連れて行くことは、父の気持を思うととてもできないことであった。そこで、私が高知から大学に通う方法を考えた。火曜日の早朝高知を飛行機でたち、火・水・木と授業し、木曜日の最終便か、金曜日の朝に高知に帰るという時間割を作ってみた。もちろん、それにかかる費用問題や、私の健康問題が解決されたわけではなかった。また、私の留守中の父の介護をどうするかという問題もあった。しかし、やるしかないであろうと悲壮な決心をしていた。

ケア・マネージャーさんにこの計画を話すが、彼女は、たくさんの問題を感じ、私の考えに賛成することに躊躇した。その代わり、地域に根付いたネットワークを持つ彼女は、親しい仲間が作ったばかりのグループホームを紹介してくれた。善は急げ、さっそく、彼女の案内で、できたばかりのグループホームを見学した。責任者は元看護師で、母親の介護を経験して、グループホーム建設を決意したとの話を聞いた。収容人数9人の小さいホームであり、居間と食堂を挟んで両側に五つ

の個室があり、高齢者の自立と共同をともに満たすレイアウトになっていた。責任者の介護への熱情と人となりに、また、施設のすばらしさに感動して、父親の入居をすぐに決めた。

11月末、少し抵抗を見せたが、父がグループホームに入所した。それから3ヶ月、心配しながら、見守っていたが、父は施設に適応し、楽しく生活をしていることを確認し、心配もなくなった。

介護から解放された私は、2月中旬、高知教会で「椎名麟三と現代社会」というタイトルで講演し、2月下旬には、NHKの釣りの番組のロケの下見に来た教え子のディレクターと一緒に、足摺岬沖30キロの漁場での「いしなぎ」釣りに同行し、体重50キロ、体調150センチのイシナギ2匹、40キロのマグロ1匹、20キロのカンパチ1匹を釣り上げるという、最初にして最後の経験をした。その数日後、家を厳重に戸締りして、安心して、帰京した。

(はしもと しげる 所員・社会学部教授)

